

全 年 GNP	31 兆 3 千億円	昭和60年末発行高	25 兆 5 千億円
昭和50年末発行高	12 兆 6 千億円	全 年 GNP	320 兆 8 千億円
全 年 GNP	149 兆 6 千億円	となっている。	

タブーは政治的な動き

新制1期 鈴木 良夫

過去に1度、同窓会の在り方・運営の仕方をめぐって、かなりエキサイトした議論がかわされたことがあった。昭和41年秋の総会でのこと。たまたま、大先輩である山崎五郎さんの選挙運動とからんでのことだったので、いまも強く記憶に残っている。さて、そのいきさつだが……。

山崎五郎さんといえば、旧制3期生で元参議院議員。昭和51年4月6日に61歳で亡くなられたが、旧制の方はもちろん、新制でも初期のほうなら面識の人が多くはいる。

この山崎さんが、中央労働委員会の事務局長を辞めて、国政選挙（衆院議員選挙）に出ようと準備に入ったのが41年1月。そして、この年6月には能代に新居を構えて、活発な事前運動を展開していた。実際に総選挙が行われたのは42年1月で、山崎さんは惜しくも落選したわけだが、ともかく事前運動の段階では東京の同窓会の間でも「同窓会の総会を開いて山崎さんを激励しよう」という声はほうはいと湧き起こった。当然といえば当然の成行きだったようにも思われる。

総会が開かれたのが41年10月初め。会場は東京・文京区の茗溪会館。このとき、司会をおおせつかった私が「山崎さんに挨拶をお願いします」と発言したとたんに、ハプニングが起こった。「質問がある」と立ち上がった人がいたのである。

「同窓会のなかには、政治的にいろいろな立場の人がいる。それを、特定の政党（自民党）から選挙に出る人に肩入れしようというのは、親睦団体であるべき同窓会の趣旨に反するのではないか」

一瞬、会場の空気はサッと白けた。このあと、事態がどう収拾されたか、こまかいことはよく覚えていない。ただ、いずれにしても「同窓会は政治的に中立であるべきだ」という意見は正論である。表立っては、反論のしようがない。

いまにして考えると、私たちがこうした意見が出ることを予想もしなかったのは、軽率だった。が、それなりの背景があったことも一言、釈明しておきたい。

というのは、当時は同窓会の総会といっても、毎年開いたり開かなかったりで、全く不定期だった。いきおい、同窓会の運営についても、厳密に吟味されることが、ついぞなかったからである。しかし、「雨降って地固まる」というか、これを機に、総会は毎年10月初めに茗溪会館で開かれるようになり、今日に及んでいる。その意味では、41年の総会は東京同窓会の歴史のなかで、ひとつのエポックを画したものでいい。

同窓会の在り方については、このあとも機にふれ折にふれて論議されてきた。基本的には、二つの対立的な意見があった。ひとつは「純然たる親睦団体で結構だ」という意見。もうひとつは「親睦団体といっても、毎年1回集まって、酒を飲んで騒いでいるだけでは意味がない。何か勉強会をやるとか、後輩の就職の世話にひと肌ぬぐとか、いろいろ「事業計画」を持つべきではないか」といった趣旨のもの。

こうした論争をもふまえて、いまの東京同窓会の会則の表現は仲々よくできている。

「本会は、同窓生各位の親睦と相互の繁栄を図り、以って郷土の発展と母校の興隆に寄与するものとする」(会則第3条)

“二つの意見”のどちらとも軍配をあげかねる表現だが、運営上は“親睦団体説”が多数意見。そして、くりかえすが、政治的な中立性を侵すことだけは、絶対とっていいほどのタブーだということである。

手元に資料がひとつ残っている。故山崎五郎さんのあとをうけて参議院議員に当選(51年初当選)した佐々木満さん(旧制15期生)が改選のさい、「佐々木満君を励ます会」が開かれた事がある(54年12月)。このとき、同窓会の小林肇・事務局

長が各期ごとの幹事に出した協力依頼状が、その資料。これを見ると、同窓会の役員が、政治的な中立性を保つことにどれだけ苦労しているか、十分おわかり頂けよう。一部を引用する。

「先日の幹事会において、佐々木満君を励ます会には能代高校同窓会としてではなく、また政党・政派にも関係なく、ただ1同窓生として各期の幹事がそれぞれの期の同窓生に案内状の配布および会費徴収のお手伝いをする事に決定しました。従って、同窓生にはあくまでも個人的に、個人の意志で参加して頂きたいのです」

何はともあれ、東京同窓会の円満な運営と末長い発展を心から祈念したい。

生活の知恵

旧制19期 坂本 史郎

五十路の峠を越えた頃から、実年の体型に推移していくのを覚え、以来、過剰エネルギー消費のため、近くのスイミングスクールに通いはじめた。

近年、交通の発達、種々の合理化、機械化、省力化の発展のため日常生活の中で、身体を動かして消費するエネルギーは減っており、運動不足が著しい。さらに食物の過剰摂取と相俟って、エネルギーの過剰摂取がもたらされていると云われている。

私が泳ぎを覚えたきっかけは、5才の時、父に専用の釣舟に乗せられ、米代川の「ガメナカゼ」にはおり込まれてからのことである。小学時代は何時となく幸町衆の一員となっており、橋の欄干から飛び降りては、行き交う人の目を驚かせたものであった。河童と云われる程水に親んで育った私は、クロール、平泳ぎ、横泳ぎ(ノシと云った)は得意なので自負してよいと思っていた。ある日スクールで、言葉も交わしたことの無い女性から、

あなたの泳ぎは非常によいが、足首と膝が悪いので直した方がよいと云われた。要するに足首を曲げることで、膝を締めないで力を抜きなさいと云うのである。

中学時代、体操部員だった私は、毎日の如く先輩に下駄を履くな(足首と爪先を伸ばせという意味)、膝を伸ばせ、肘を曲げるな。と、どなられながら技を身につけた私に、全く逆のことをやれと云うのである。一応は謙虚に受け止め、直そうとしたが「雀百まで踊り忘れず」で、年令も手伝ったこと、そう簡単には直らない。自負は、もともと我流だったのであるから仕方がないと観念している。

年齢を重ねることは神の恵であると云うが、若さを保つことは生活の知恵であると思う。老健でいる人を見ると、何んと美しく、素晴らしいことであろうか、と思う昨今である。